The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
2004, Vol. 6, No.1, 97-111

ISSN 1344-7505

テーマとレーマの定義と導入——ドイツ語教科書記述法に寄せて——

山本　務*

要　旨

ひとつの文（談話）が異質な二つの要素から成り立っているということ、このことはヨーロッパのギリシャ古典古代から気づかれてきたことである。実際いかなる文も、二つの異質な要素へと分かれるということは驚嘆に値し注目すべきことである。しかし、それが伝統的な「主語と述語」ではなく、「主題（テーマ）」と「レーマ」という命名と探求を得たのは、チェコのプラハで1960年代に至ってから初めてであった。とりわけ「テクスト言語学」の分野では、「テーマ・レーマ——関係」は基礎概念となった。

ところが、その研究成果を日本のドイツ語教育へと導入するということは、長いこと日本の大学でなされることがないまま今日に至っている。これはドイツ語教育界の知的怠慢であると、筆者は考える。

旧来の教科書記述では用語に対して定義が欠如して、教師の創意工夫の余地だと考えられてきた。しかし新たに導入される用語としてテーマとレーマは、種々に定義付けられなければならず、また、説明と演習という記述方法が採用される所以である。

人間の最も素朴な言語——思考活動は、おそらく「既知と未知——関係」に立脚するものであろうという基本的想定をもとに、テーマ的とは、より未知の要素が少なく、レーマ的とは、より未知の要素が高いと名づけられる。

キーワード：テクスト言語学、「テーマとレーマ」の諸定義づけと分解、既知と未知、語順、日本語とドイツ語。

はじめに

「テーマ・レーマ関係」の概念を導入し確立することによって、ドイツ語における自由な空位空間である文頭語の性質は充分に解明可能であることを、筆者は先に立証した（山本、2001年）。それは例えば、次のようなテクストに見出される：

Gesucht wird: Menschlichkeit

»Fundüro«—der neue Roman von Siegfried Lenz

(Aus:*Neue Zürcher Zeitung* von 09.Juli 2003)

これは新聞記事の見出し語であるが、「テーマ・レーマ関係」の視点にとっては、3点が顕著であり、それらが指摘され得るし、また指摘されなければならない。第一に、過去分詞を文頭に言う受動態であり、„Gesucht wird“が「テーマ・レーマ関係」の導入であり、第二に、二重点 „: “の使用によって、「テーマ・レーマ関係」の念押しであり、第三に、明確な「レーマ」として、„Menschlichkeit“の呈示というわけである。

「人間性が探求される」（„Menschlichkeit wird gesuch“）に対して、「探求されるのは、すなわち、人間性である」（„Gesucht wird:

* 九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科

Menschlichkeit“）という日本語を考えれば、その「既知・未知—関係」の緊張性は明らかであろう。

さらに、テーマ的性質が濃厚な„es“に対してレーマ的性質が濃厚な„das“（いわゆる「焦点代名詞」）の場合、それが「新情報」を提起するわけでは全くなく、「テーマ・レーマ関係」それ自体を示すという認識も得られた。文例として：

Die japanische Aussenpolitik glaubt,von den Nachbarn verstanden und akzeptiert zu werden.Tatsächlich ist das(oder dies) aber nicht der Fall.(Helmut Schmidt)（日本の外交政策は、隣国から理解され、かつ受け容れられていると思っている。実際はしかし、そうではない。/ „Und du!“ (damit meinte sie mich) „du wackelst nicht so mit dem Stuhl! Das haben wir auch schon tausendmal gesagt. “(Kempowski)（「それに君だ！」——「君」ということで彼女は私のことを言っていた——「君は、そんなふうに椅子をぐらぐら揺するでない。このことを私達はもう千回も言ってきたのよ」。）

ドイツ語の「das」に似て、日本語の「これ」も、独自に「テーマ・レーマ関係」を表出する：

ドアは開けるか閉めるかである。半開きのドアは、イエスでもこれを覗く。Eine Tür muss man entweder aufmachen oder zumachen. In eine halbgeöffnete Tür guckt selbst Jesus hinein./

「これを」は、無論言わなくても文意は通じるが、しかし前出の「半開きのドアは」が「テーマ・レーマ関係」として導入されていることを確認する機能であり、それに対する「レーマ」を次に「イエスでさえも覗く」として打ち出す予期表示である。また日本国憲法の条文における「これ」、例えば「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する」（前文）、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」（第９条）が存在するが、その場合「これを」とは何かと問われた場合、「強調」であるといった曖昧な解答ではなく、「テーマ・レーマ——関係」の明示であるという解答が唯一の明晰な解答であり得るのではないだろうか。次の場合も同様である：

この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない。（第12条） Freiheiten und Rechte,die dem Volke durch diese Verfassung garantiert werden, müssen durch unablässige Bemuhüngen des Volkes erhalten werden.(Art.12) /
思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。(第19条) Die Freiheit des Gedanken und des Gewissens darf nicht verletzt werden.(Art.19)/

さて本稿は、この「テーマ・レーマ関係」をもっとゆるやかな形で、つまり上掲拙稿のように一挙に言語の「関係概念」(Relativbegriff)の設定としてではなく、「関係概念」としての成立一歩寸前のものとして確保した方が導入として適切ではないかと考え、さらに、その研究成果を日本のドイツ語教育へと組み込むためにドイツ語教科書として可能なものと

なり得ないものか、これを探求し実現する試みである。というのも、「空位の文頭に何を言うか」という厄介な問題に対して、従来の日本の――日本だけではないが――ドイツ語教育界は、その中級段階でさえもこれに一義的に解答することなく、否、これを主題とすることも皆無であったという長い歴史を持っているからである。教科書執筆にも精力的であった関口存男文法でさえも、筆者の見るところでは、散見されるという事情でしかなく、主題として提起されることがなかった。したがって教科書記述として、その概念の導入に当たり、その定義付けがまず要求されるであろう。「テクスト編」として、その定義と説明が、そして「演習編」として独作文練習というように、二部構成にした次第である。

ところで知の二類型として「既知」(既に知っている事柄) と「未知」(未だ知らない事柄) の対極を想定するならば、「テーマ」とは「既知」性へと牽引され、「レーマ」とは「未知」性へと牽引されるものであるが、その場合、これに見合う人間存在は、どのように想定されるだろうか？ それは端的に、「人間とは、既知と未知に相渡る言語的存在である」と定義される。人間とは常に、既知を踏まえ前提し、未知へと手を差し延ばす、つまり「分かりかけている」言語的存在である、という人間観である。

Ⅰ．テクスト編

❶ 次のドイツ語に対して（日本語に対しても）**性質が異なった情報内容を持つ二つの部分へと分ける**ことは、格別難しいことではないはずです：

Ein Ausbruch der Rinderkrankheit BSE *würde in Japan nicht verhindert werden können.*

（狂牛病の発生は、日本では阻止出来ないであろう。）

前半部分„Ein Ausbruch der Rinderkrankheit BSE“は、それがたんに「名指しされ、挙げられる」(, nennen ‘)部分であり、この挙げられたことに関して、イタリック体で表記された後半部分*„würde in Japan nicht verhindert werden können“*は、それが「言明され、述べられる」(, aussagen ‘)（特徴１）――このように指摘されると、たしかに異質な二つがひとつの発話を構成する要素であるということが見えてきます。同様のことが、次のそれぞれの一文に対しても妥当するはずです：

würde ein Ausbruch der SARS *in Japan verhindert werden können?*
（サーズの発生は、日本で阻止出来るだろうか？）
In Japan *würde ein Ausbruch der Rinderkrankheit BSE nicht verhindert werden können.*
（日本では、狂牛病の発生は阻止出来ないであろう。）

実際この二つの部分に関して、「特徴1」以外に様々な角度から異なった性質を指摘することが出来ます：

特徴２．前半部分は、枠組み（視点、視野）を決め固定化する働きをし、その枠組みの内部で、後半部分が当てはまる。
特徴３．前半部分は当然のことながら、時間的に先に言われる性質をもち、後半部分は、時間的に後で言われ、しかも後半部分が情報全体の主要内容を担う。なぜならば、
特徴４．前半部分は、(いつもとは限らないが) 既知のことであり、したがって重要度が低く、後半部分は、(いつもとは限らないが) 未知のことであり、したがって重要度が高い

からである。
特徴５．前半部分は、比較的弱く発音され、後半部分は、第一アクセントを持つ。

「特徴２」に関しては、学習者自身による自力発見が可能ですが、「特徴３」として、言語が時間的に一次元の前後関係として現象するということも特徴的であります。ところで後半部分より前半部分の方が「情報全体の主要内容」であると思い込んでいる学習者が大半を占めるのが現状でしょうか。そのことは、「枠組み」を決めるという「特徴２」に関することであると指摘します。そして次の「特徴４」と併せて、「既知」よりも「未知」の方が言語にとってより重要であるという確認が要求されます。

以上５点に及ぶ対比現象を全体として特徴づけるために、言語学者たちによって、前半部分が、»**Thema**«（英語：theme、仏語：thème）と命名され、後半部分が、»**Rhema**«（英語：rheme、仏語：thème）と命名されます。ともに古典ギリシャ語に由来する用語（前者は「下に置くこと」、後者は「言葉、動詞」という意味）です。テーマとは、何かが言明される対象であり、レーマとは、その対象に関して言明される事柄であると定義され得るし、また、「所与と新規given—new」という基準によって、テーマとは、「所与のこと」、文脈や状況によって、あるいは一般的に既知のことであり、レーマとは、「新しいこと」、かつて言及され得たことであったとしても、今や言明の中核を表示することだとも定義付けられます。

前者は、すでに日常の日本語としても「テーマ」「主題」「提題」という言葉が定着していますが、後者は、「レーマ」「展開部分」「展題」「題述」など定訳が未だ存在しておりません。ここでは双方ともに、適用対象は文（発話）、あるいは二、三個の少数の文から成るテクストとして限定し、一般に、話題とすることと、その話題に関して言いたいこと、この二つのことを指すものと考えます。

❷－１　そして原理的には、すべての発話は、「テーマ」と「レーマ」の二つに分けられ（分節され）得るのです。例えば次の文は、どこまでがテーマ（T）であり、どこからがレーマ（R）であるのかを、指摘することが出来ます：

この時計は（T）、弟に贈ります（R）。妹には（T）、本を贈ります（R）。
Diese Uhr(T)—schenke ich meinem Bruder(R).
Meiner Schwester schenke ich(T)—ein Buch(R).

はじめの文は、テーマの部分をもっと先まで延ばし、これに応じて、あとの文も次のように捉えることが可能です：
Diese Uhr schenke ich(T)—meinem Bruder(R).
Meiner Schwester(T)—schenke ich ein Buch(R).

いずれの場合も、聞き手と話者との共有事項（テーマ）の挙示と、話者による占有事項（レーマ）の呈示という異なった思考回路の働きが機能していることをつかんでください。

❷－２　同じ文成文をもつ一文でも、どれをテーマとし、どれをレーマとするのかは、話者によって選択することが可能です：
Man *wurde im klassischen,d.h.retrospektiven Sinne in aller Regel für die Folgen seines Handelns verantwortlich gemacht.*（人々は、古典的な、すなわち過去志向的な意味で大抵は自らの行為の諸結果に対して責任を負わされた。）

これに対しては、先ずテーマとみなす軽い情報の成文を文頭へと先置し、次いで最も言いたいこと、つまりレーマを文末へと重心移動させて言うことが出来ます。次のような操作です：

(a) Im klassichen,d.h.retrospektiven Sinne
wurde
man in aller Regel für die Folgen seines Handelns verantwortlich gemacht.

(b) Im klassischen,d.h.retrospektiven Sinne verantwortlich
wurde
man in aller Regel für die Folgen seines Handelns gemacht.

(c) Im klassischen,d.h.retrospektiven Sinne verantwortlich gemacht
wurde
man in aller Regel für die Folgen seines Handelns.
(Kurt Bayertz,1995)

(a) 古典的な、即ち過去志向的な意味では、人々は大抵自らの行為の諸結果に対して責任を負わされた。
(b) 古典的な、即ち過去志向的な意味で責任ありと、人々は大抵自らの行為の諸結果に対して責任を負わされた。
(c) 古典的な、即ち過去思考的な意味で人々が責任を負わされたのは、自らの行為の諸結果に対してであった。

「文頭語は文成分のうちひとつだけ」という原則は、機械的に適用する必要がなく、「ひとつとみなす」という含意であり、以上のうち（c）が、最大限の情報輪郭量をもつ成分をテーマとし、最小限の情報輪郭量をもつ成分をレーマとして打ち出すことに成功しています。

❷－3　次のような書かれ方がされている場合：
„Wir tun es“,sagte er, „nicht für heute,nicht für morgen,aber vielleicht für übermorgen.“（「我々がそれをしているのは」と彼は言った。「今日のためではなく、明日のためでもなく、しかしもしかしたら明後日のためかもしれません。」）

ひとつの直接話法の会話文を、„sagte er“で導いているわけですが、これは、„Wir tun es“ までがテーマであり、„sagte er“の次の„nicht“からがレーマであることを明示しているわけです。訳文も、そのように（「…のは…のためである」）作られていることに注意してください。次の文例も、テーマとレーマとの刻み目をそれ自体として明示しています：

» Siehst du,David,wieder einmal seid ihr die Aggressoren.«
» Seit wir Jesus ans Kreuz geschlagen haben« ,erwiderte ich,»*sind wir immer die Aggressoren.*«(David Ben－Dor: *Die schwarze Mütze*)
「見ろよ、デイヴィッド、またもや君たちは侵略者だ」
「イエスを十字架に架けて以来この方」、と私は反論した。「俺たちはいつも侵略者なのさ」

❷－4　次の対話のように、いったん発話が途切れて、レーマがすぐに言われない場合、また同じテーマに関して、話し相手が割り込み引き取って別のレーマを出す場合も、テーマとレーマへの分岐が明示されるわけです：

» Riccard: (…) : Dann hat das Feuer,das ihn

auslöscht,

wenn Gott die Sühne nur in Gnaden annimmt,vielleicht ---

Abt: Riccard!

Riccard: ---vielleicht auch die Schuld unsrer Obrigkeit getilgt.Die Idee des Papstums---

Abt: ---wird Auschwitz überleben! Was zweifeln Sie,was quälen Sie sich so,Riccard: es ist vermessen.≪(Rolf Hochhut: *Der Stellvertreter,* Dritter Akt, 2 .Szene)

（リカルド: この贖罪を神が恩寵によって認めてくださるとすれば、その肉体を焼き尽くす炎は、もしかすると……

僧院長： リカルド！

リカルド：……わたしたちの上なる権威の罪をも抹殺してくれるでしょう。教皇制の理念は……

僧院長：……アウシュヴィッツにはかかわりなく永続する！ 何を疑っておる、何を苦しんでおる、リカルド、それは不遜というものだ。ロルフ・ホーホフート『神の代理人』森川俊夫訳）

リカルドが„vielleicht---"（「もしかすると…」と一度は言いよどむ、まさにそこに、僧院長は、その先の発言内容を予期して恐れ多いことをと、それを控えるように、相手の発言を制止しようと眼を覚ませと言わんばかりに正気を求めて「リカルド！」と、その名を呼びます。しかしリカルドは一向にお構いなくもう一度„---vielleicht"と続けます。「アウシュヴィッツで誰かを焼き殺した炎はもしかすると、…我らがお上の権威の罪も消し去ったのでしょう。教皇制度の理念は…」。リカルドが「教皇制度の理念は、アウシュヴィッツで滅びた」とでも言おうとすることを確実に予感した僧院長は、今度はその発言に割り込んで、「アウシュヴィッツを生き延びるであろう」と、別のレーマを先に提示します。

同じテーマに対して、違ったレーマが与えられる文例をもう一度：

Verantwortlich kann man nicht „sein", sondern wird man(von anderen) „gemacht".(Kurt Bayertz, 1995)

（責任が「ある」ではなく、責任あると「負わされる」のだ。/「責任」とは、「あるなし」の問題ではなく、「あるなしとされる」問題である。）

❸－１　ところで、次のような、それぞれ単独の発話を考えてみます：

„Riccard！"　（「リカルド！」呼びかけ）
„Der?"　（「やつのこと？」疑問、質問）
„Komm mit!"　（「ついてきな！」命令、要求）

このように、二つの分節部分がもはや備わっているわけではなく、ただ一つしか存在しない要素から成り立つ発話ももちろん、存在しています。では、こういった短い発話は、以上の「テーマ」と「レーマ」という考え方からみれば、どちらに属するものでしょうか？ ことごとくの場合が、テーマではなく——テーマは、話者と聞き手の間で了解済みで自明化され言われることがないまま——、レーマであることに気づかれることでしょう。つまり、レーマだけから成り立っているのであり、その意味で、**レーマを欠いた完全な発話は、存在しない**ということになります。

❸－２　さらにまた、上記❷の文例中に見られるように、途切れた発話が「……」と表記されていますが、言われることのない、うまく言葉が出て来ない、何か言いたいことがあるようだが、言われるまでに至っていない、何か言いたいことがあることだけは分かる、

これはつまり、「言いよどみのレーマ」と名づけられます：

Daß du recht hast,sehe ich zwar ein,aber------.
（たしかに君の言うことは正しいと僕は分かるのだが、だけど……。）

言いよどみだからといって、それが不完全な発話であるという断定は避けられるべきです。

❹ また日常会話では——ドイツ語も日本語も——、「テーマ」の部分が、会話の受け手にとっては了解されたものとして発話されず、「レーマ」だけが言われることが普通であるという事実も判然とします。
例えば：

Ich lerne Deutsch. —— *In der Schule?* （「ぼくは、ドイツ語を勉強しています」「学校で？」）
Ich lerne Deutsch. —— *Seit wann ?* （「ぼくは、ドイツ語を勉強しています」「いつから？」）
Was hast du den ganzen Tag gemacht? —— Gearbeitet. （「一日中何したの？」「仕事した」）
Die Welt: Die USA haben die Ratifizierung abgelehnt.Welchen Schaden hat das für den ICC?
Andreas Zimmermann: *Letztlich keinen so großen. (Aus: Die Welt* v.13.04.02) （「ウェルト」紙：アメリカ合衆国は条約批准を拒否しましたが、これは、国際刑事裁判所にとってどのような痛手になるでしょうか？ アンドレアース・ツィンマーマン：究極的には、それほど大きな痛手にはなりません。）

❺「テーマ」が「主語」と一致することもあれば、一致しないこともありますが、それは偶然事であり理論的には何の問題もありません：

Ein Ausbruch der Rinderkrankheit BSE *würde in Japan nicht verhindert werden können.*
テーマ　　レーマ
主語　　述語
In Japan *würde ein Ausbruch der Rinderkrankheit BSE nicht verhindert werden können.*
テーマ　レーマ　　θ
θ　　述語　　主語

❻－1　次の文例で、どの部分が「テーマ」であり、どの部分が「レーマ」であるのかは、以上の定義と説明によって、すでに容易に判別されます：

An einer Verhinderung der Rinderkrankheit BSE | ist die japanische Regierung nicht interessiert gewesen. （狂牛病の発生阻止には、| 日本政府は関心を示すことがなかった。）
Mit zehn Euro | kaufe ich es.——Mit zehn Euro | verkaufe ich es nicht. （10ユーロなら、| 買いますよ —— 10ユーロでは、| 売れないよ。）

タテに刻み目を入れましたが、その前の部分が「テーマ」であり、その後の部分が「レーマ」であると、判断出来たことでしょう。
❻－2　最後に確認しておきましょう、次の二つの文は、その意味内容が違っています：
(a) Vorne sieht man einen Berg.
（前方に山が見えます。/前方は、山です。）
(b) Einen Berg sieht man vorne.
（山が前方に見えます。/山は、前方です。）

語順が違っているだけで、要するに、同じようなことが言われていると思われるかも知れませんが、やはり違った内容です。そのことは、以上のテーマとレーマという考え方によって明確にすることが出来ます。つまり次のように、それぞれ、テーマとレーマが違っ

ていることが分かります：

(a) Vorne *sieht man einen Berg.* / Vorne sieht man *einen Berg.*

(b) Einen Berg *sieht man vorne.* / Einen Berg sieht man *vorne.*

「なんのこと」が「どうである」という観点から見ると、（a）と（b）は、それぞれ「主題」の選び方と「焦点」の当て方が違っているわけです。その違いは、それぞれが、どういう質問に答える文であるのかを考えてみることによってもまた、説明がつきます：

(a) Was sieht man vorne?
（何が前方に見えますか？）

(b) Wo sieht man einen Berg?
（どこに山が見えますか？）

まったく違ったことが問われ、答えられているのだと判明します。こうしてみると、テーマとレーマという考え方の有効性と説得力が了解出来ます。

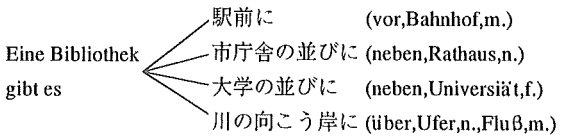
次の文例では、テーマとレーマは、どうなっていると、判断しますか？

Der Ausbruch einer Rinderkrankheit BSE in Japan hätte verhindert werden können,wenn die japanische Regierung,genauer gesagt,das Ministerium für Landwirtschafts—,Forst—und Seefischereiwesen nicht Augen und Ohren verschlossen hätte.（日本での狂牛病の発生は、行政府、より正確には農林水産省が目をつぶり耳を閉ざすことをしなかったならば、防ぎ得ていたであろう。）

主文と副文から成り立っており、主文が先に、副文が後で言われている文ですが、テーマは、主文全体であり、レーマは副文であると、したがって話題が主文であり、言いたいこと、つまり、文の主要部分は、副文であると判断出来ます。

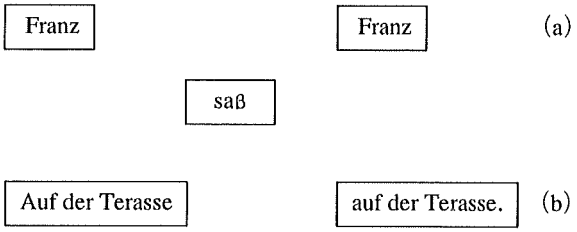
Ⅱ．演習編

1．テーマは固定しておいて、レーマに当たる部分をドイツ語で変換しなさい：Gibt es in dieser Stadt eine Bibliothek? —— Ja,natürlich. Eine Bibliothek gibt es（駅前に、市庁舎の並びに、大学の並びに、川の向こう岸に）.



2．定動詞第２位の原則によって、次のように各種の文が可能ですが、その違いを明らかにしなさい。

－1.



3．次の文を、「daß文」を文頭に出す倒置法で言い換え、„zwar---aber“ で包み込み、そして„aber“ 以下は、言いよどんでみて下さい。

例：Ich sehe ein,daß sie hübsch ist.⇒ Daß sie hübsch ist,sehe ich zwar ein,aber------.

（1） Ich sehe ein,daß ich nichts weiß.

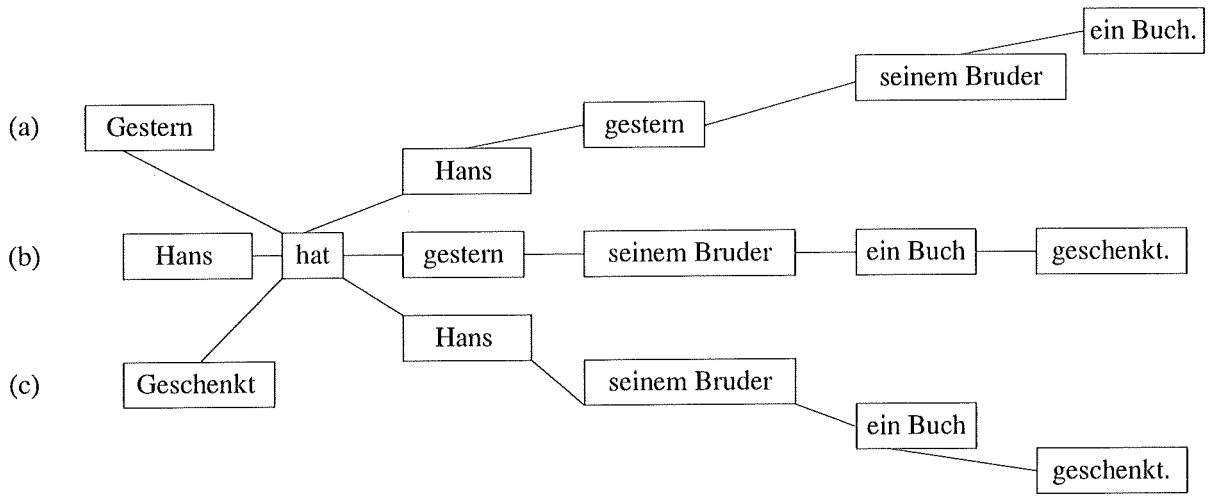
（2） Ich sehe ein,daß es stattlich aussieht.

（3） Ich sehe ein,daß er fleißig ist.

4．どこまでをテーマとし、同時にどこからをレーマとするのかを、判断しなさい。

（1）München hat eine Residenz und ein Hoftheater. —— Und den Hofgarten und daß

－2．



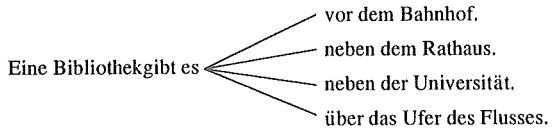
Oktoberfest.

(2) »Wir wollen nicht daran denken.« »Und nicht erinnert werden.«

(3) Kommen Sie auch mit? —— Natürlich.

解答例

1．



2．双方の違いを日本語によって示すと、次のようになります：

－1．(a) フランツは、テラスに座っていた。／フランツが座っていたのは、テラスであった。

(b)テラスに、フランツが座っていた。／テラスに座っていたのは、フランツであった。

－2．それぞれの違いを、日本語で示すと、次のようになります：(a)昨日のことだが、ハンスは弟に本を贈った。(b)ハンスなら昨日、弟に本を贈った。(c)本なら、ハンスは昨日弟に贈った。(d)贈ったといえば、ハンスは昨日弟に本をそうしたのだ。

3．

(1) Daß ich nichts weiß,sehe ich zwar ein,aber…….

(2) Daß es stattlich aussieht,sehe ich zwar ein,aber…….

(3) Daß er fleißig ist,sehe ich zwar ein,aber…….

4．

(1) München hat *eine Residenz und ein Hoftheater.*

——*Und den Hofgarten und das Oktoberfest.*

テーマ　レーマ　(テーマの省略) レーマ

ミュンヒェンは、宮殿と宮廷劇場を持っている——それに、宮庭と10月祭もあります。

(2) »Wr wollen *nicht daran denken.*« »*Und nicht erinnert werden.*«

テーマ　レーマ　(テーマの省略) レーマ

「私達は、そのことは考えないつもりです」「それに、思い出されたくもありません」

(3) *Kommen* Sie *auch mit? Natürlich.*

レーマ テーマ　レーマ (テーマの省略)

あなたも御一緒にいらっしゃいますか？もちろんですとも。

«独作文練習問題»　文頭に何を言えば適切か、どれをテーマとし、どれをレーマとするのかを考えて、ドイツ語にしなさい。

Ⅰ．

1．星占いの質問には、お答えしかねます

（日本国立天文台）。

(auf etwas antworten,Sterndeuterei,f., könnte, Staatssternwarte,f.)

2．喧嘩には、勝たなくちゃ。勝ち目のない喧嘩は、しないのだ。

(man,im Streit, Oberhand,f., gewinnen, müssen, wollen, aussichtslos, Streit,m., nie, ich)

3．ジャガイモなら家で栽培するけど、ニンジンは市場で買うよ。

(die Kartoffeln,die Möhren, züchten, kaufen, wir, selbst,auf dem Markt)

解答例

1．Auf eine Frage der Sterndeuterei könnten wir nicht antworten.(die japanische Staatssternwarte)

2．Im Streit muß man die Oberhand gewinnen. Einen aussichtslosen Streit will ich nie.

3．Die Kartoffeln züchten wir selbst,aber die Möhren kaufen wir auf dem Markt.

補論（学習指導方法） 独作文の練習問題としては、まず以上の３題に正しく解答することを目指し、要領を得ていない学習者は、もういちど上述の❶から❻までの定義と説明に立ち返るように指導します。

日本語としては、「星占いの質問には」の「は」に注目させて、それが「題目」「主題」を表現していることに着眼させます。「喧嘩には、勝たなくちゃ」における「喧嘩には」の「は」が、また「ジャガイモなら家で栽培します」における「ジャガイモなら」の「なら」が、文法上の「主語」ではなく、「目的語」であること、そして「主語」ではなく「主題」を選択し限定していることを特に注目させます。そして以下、Ⅱ.Ⅲ.を各ステップとして習得し納得しながら、学習課程を歩ませます。

この時点で学習の達成が不十分だと判明することがあり得ます。例えば、「この時計は、弟に贈ります。妹には、本を贈ります」を独作文する場合、指導しないかぎり、初級コースを終えた学習者でもほとんどが、次の(a)のように表現し、(b)のように表現しないのです：

(a) Ich schenke meinem Bruder diese Uhr. Ich schenke meiner Schwester ein Buch.

(b) Diese Uhr schenke ich meinem Bruder. Meiner Schwester schenke ich ein Buch.

あるいは、たとえ学習した後でさえも、いつのまにか(a)のように元の木阿彌に戻ってしまうのが現状のようです。これは、なぜなのでしょうか？ おそらくは英語学習の結果、そのような考え方が生まれてしまったのだと考えられます。つまり先ず文頭に「主語」を、次いで「述語」を言うという語順が、英語学習の結果として考える余地のないほど無意識で自明のものとなっており、その強力な「刷り込み」が働き、ドイツ語学習の上では、その自明の前提が逆に、言語心理的に強力な手枷、足枷となり掣肘する現状であるからであり、文頭と第二位という座席指定の安楽さ、「考えないという愚昧化」（アーレント『イェルサレムのアイヒマン』『精神の生活』）の中で居眠りを習慣化し、したがって文頭に発話主体である自分が選んだ語句が、それも特有の思考回路（「テーマとレーマ」）によって選んだ語句が発話されるのだと理解するまでは、相当に困難な時間が伴います。

ちなみに、日本の英語の学校教育では、いわゆる「５文型SV/ SVC/ SVO/SVOO/SVOC」の場合、その相違に言及するだけで、その共通性に言及しません。つまりすべてに「SV」が共通しているが、それは何故か、その根拠が何かは教えられません。同様にドイツ語教育でも、「定動詞第二位の原則」ということは教えられても、その根拠が何であるかが教えられてきませんでした。この点、言語学者による強力な介入と関与が求められて然るべ

きでしょうが、教科書執筆における言語学者の怠慢という非難が免れないでしょう。

つまり言葉の順序は、何の順序かという問題ですが、言葉は、「既知」から「未知」へと、川の流れが後戻りすることなく高きから低きへと流れるように、書き言葉であろうと話し言葉であろうと、縦書きであろうと横書きであろうと、古典ギリシャ語であろうと日本語であろうと、ひたすら一方向的に、言った先から消えてゆき、次から次へと繰り出されていくという時間的にリニアーな継起物(zeitlich－lineare Abfolge)である――つまり言葉の「線条性」(Linialität)という普遍的な原理と、もうひとつの対抗原理、つまり聞き手と話し手に予め共有される「反省的･論理的順序」としての「固定（指定）位置」の決定という特殊的な原理と、相異なった二つの原理によって語順が決定されるということは教育内容に値するのではないでしょうか。

尤もその場合、後者の原理に関して、文中において最も重要なものが存在するのか、存在するとすれば、それは何か、それなくしては文が文として成り立つことがない、文をして文たらしめているのは何かというソクラテス――アリストテレス以来の「普遍的なもの」を求める問いと答えの探求が根本にあり、そのことへの解答として「動詞」が最重要な文要素として「第2位へと固定」されたという思考の事情、英語の場合さらに、「固定位置」がより規則化され、英語史的に言って、さらに「主語」までも「文頭」に固定されたという歴史的事情の指摘、したがって必然的に表現機能としての「テーマ・レーマ」が弱体化され平板化されるという指摘も必要になるでしょうか。

日本語の場合、後者の「反省的・論理的順序」への考察がなされないまま、つまり、それが零というわけであり、その代わり、ドイツ語、英語などで「反省的・論理的順序」として文中で最重要な単語として承認された「動詞」が（前者の普遍的な原理とともに）文中で最後の位置を占めるという形態を獲得しております。

いずれにせよドイツ語学習に際して「先ず主語、次いで述語」という語順への逆転現象を克服するには、日本語が有効です。つまり文例として日本語だけを用いてその「題目化」ということを学習させ、次いでドイツ語表現によって達成感を実現させることも可能です。そこで次のような文例を読み上げさせて、日本語の「は」という言葉が示す「主題」呈示力（「対比」力も含む）と言いたいことを言う、あるいは言いよどみ口ごもる「レーマ」の呈示と、この二つに関する連関、或る共通性を喚起し、それに気づかせます：

1．「真葛野も枯れ明るみて男には敵（かたき）われには思う人ある」（馬場あき子『ふぶき野』）/お節介が裏目に、余所のもめごとには、見て見ぬふりを。/「介護保険、世論調査『期待』は半数どまり、『導入』には7割賛成」（「西日本新聞」1999年6月6日付）。/日本は、車は左側通行です。/「武蔵は俺が斬る」（佐々木小次郎）/「犯人（ホシ）は俺が挙げる」（平塚八郎、1963年吉展ちゃん誘拐事件の際の横浜警察署刑事）

2．身体は、うそをつかない。/幸福は、おカネでは買えない。/「ダンスは、うまく踊れないの」/もう銃は、取らない。/「もう頬づえはつかない」（1979年映画標題、桃井かおり主演））/大江は読まない。/若者は好きでない。/政治家とグリーンピースは、好かん、群れるのは好きでないからだ。/酒は自宅では呑まない。/良心では食べてはゆけない。/芝居じゃ食べてゆけないでしょ、どうするの、将来？/「（さよならに）返事は要らない」

（宮部みゆき著標題）。/大きな政府は要らない。/「さいさね、ああいう男に女房は要らない。」（芝木好子『隅田川暮色』）/憐れみは要らない。/

3．「問われているのは、無為無策のままいたずらに時を過ごした罪である。自社の乳製品による中毒とおぼしい被害情報が入った直後、スナックで開いた対策会議は危機感に乏しく、その夜、社長にはついに連絡がつかなった。以後、情報開示も製品回収も遅れ、被害件数を『戦後最大』にまで拡大した」（「日本経済新聞」2001年3月18日付「春秋」より）。/「薬害エイズで行政に問われたのは、有効な手を打たずに結果的に感染を広げて多くの命を奪った不作為、何もしなかった罪である。」（「日経」2002年4月3日付「春秋」より）

日本語の「係り－結び」の緊張と照応の言語感覚が、この「テーマとレーマ」のひとつの言語感覚でもあります。上記の諸文例は、その感覚を触発し各学習者によって自分で確認することに使えます。

ところで国語学者大野晋は、『日本語練習帳』（岩波新書、1999年）で、ヨーロッパの伝統文法「主語と述語」による解明に取って替わって、日本語の「ハ」の機能を4個へと収斂しました。そのひとつは、「問題（トピックtopic）を設定して下にその答えが来ると予約する」こと、「話しの場を設定する」こと、「題目を提示する」ことだというのです。これは、明晰です。「山田君はビデオにうずもれて暮らしている。彼は、ビデオテープの山の中に自分の記念碑を建てている。それを繰り返している間は試験に受からないだろう」。この文例における三つの「は」に関して、それぞれが「山田君は――ドウシテイルカトイウト――」「彼は――何ヲシテイルカトイウト――」「それを繰り返している間は――ドウナルカトイウト――」というように、カタカナ表記の部分が補って考えられるというのです。これも、実に明晰です。しかし実は、大野著は明示していないのですが、このカタカナ表記で示される「問いと答え」という「期待の地平」こそ、「テーマ・レーマ――関係」に他なりません。したがって大野著に見られる見解は、日本語に固有の文法でもなければ、非ヨーロッパ的な文法でもなく、ヨーロッパでもすでに「主語と述語」以外に新たなテクスト文法として登場している「テーマとレーマ」という視点へと包括されるものです。

Ⅱ.

1．ジャガイモは、ナイフで切ってはいけません。フォークで取り分けます。

(Kartoffeln,pl.,mit dem Messer, zerschneiden, dürfen,man,zerteilen,mit dem Gabel,werden)

2．ハンスなら、よく知っているが、妹の方は全然知らないね。

(Hans,kennen,sehr gut,aber,sein,Schwester,nie)

3．君のことなら喜んでお手伝いするが、君の妹までは、お手伝い致しかねる。

(jemandem helfen,gern,dein,können)

4．顔は知っているけど、名前が出てこない。

(kennen,Gesicht,n.,Name,m.,vergessen)

解答例

1．Kartoffeln darf man nicht mit dem Messer zerschneiden.Sie werden mit dem Garbel zerteilt.

2．Hans kenne ich sehr gut,aber seine Schwester kenne ich nie.

3．Ich helfe dir gern,aber deiner Schwester kann ich nicht helfen.*Oder* Dir helfe ich gern,aber deiner Schwester kann ich nicht helfen.

4．Ich kenne sein (*oder* ihr) Gesicht,aber seinen

(*oder* ihren) Namen habe ich vergessen.

Ⅲ.

5．持って生まれた性格は、直らない。
(Charakter,m.,ändern,können,man)

6．税金は、払わなければならない。
(Steuern,müssen,zahlen,man)

7．電車の切符（入場券）は、「lösen」するのだ、「買う」のではない。
(Fahrkarte,f.,Eintrittskarte lösen,man,nicht kaufen.)

8．新しい車が必要です。費用は、我々が工面します
(Sie,neu,Wagen,m.,brauchen,Mittel,pl.,dafür, besorgen)

9．新しい眼鏡が要ります。お金は、出してあげます。(Brille,f.)

10．ドイツ連邦両議会は、4月28日に戦後50周年を記念します。基調講演者は、ポーランド外相ウワディフワフ・バートシェフスキです。(Bundestag,m.,Bundesrat,m., gedenken,am 28.April,Hauptredner,Aussenminister,polisch,Wladyslaw Bartozewski)

11．ヴァイツゼッカー大統領は、6月30日をもって退任します。後任は、ローマン・ヘルツォークがなります。
(Bundespräsident,Weizsäcker,zurücktreten, Nachfolger,werden,Roman Herzog)

解答例

5．Den(Seinen) Charakter kann man nicht ändern(*oder* verändern).

6．Steuern muss man zahlen.

7．Eine Fahrkarte(Eine Eintrittsfahrkarte) löst man,nicht kaufen.

8．Sie brauchen einen neuen Wagen.Die Mittel dafür besorgen wir.

9．Du brauchst eine neue Brille.Die Mittel besorgen wir.

10．Am 28.April gedenken der Bundestag und der Bundesrat des 50.Kriegsendes.Hauptredner ist der polische Aussenminister Wladyslaw Bartoswski.

11．Der Bundesprasident Weizsäcker tritt am30. Juni zurück.Nachfolger wird Roman Herzog.

終わりに

以上ドイツ語を主たる対象として考察してきたが、折々に日本語にも言及した。というのも明治時代の中葉以降、日本語がヨーロッパ語のアルファベットへの類比で子音と母音の区別に基づき母音中心語の自画像を得て「五十音図」を体系化し、また書き言葉として日本文化史上初めて「句読法」(Interpunktion; punctuation）を採用したわけだが、それ以来100年間、国民的規模において「読点はどこに打つか」という論議が生じたであろうか？その点「テーマとレーマ」という考え方は、日本語における「読点」の位置を考える上でかぎりなく示唆的に寄与し得るであろう。

ところでドイツ語文は「dynamic動態的」であり、英語文は「誕生の際のオギャーがない、stillborn死産的」であるという指摘がしばしば見られるが、その根拠のひとつとして、英語が近代英語の成立とともに、ラテン語には存在しない「主語」を「人称」として前面化し、これを文頭に配置することになったという歴史的な事態が読み取れる。文中の固定位置がひとつではなく、二つまで存在するという負荷性が高い言語現象は、ドイツ語学習を通じて初めて特異な事態であると判明する。そして世界におけるドイツ語学習の魅力のひとつは、文頭語の自由選択にあり、しかも文頭語の選択がまさに「テーマとレーマ」を「テーマ・レーマ——関係」として「関係化」した「関係概念」として成立すること、この点への教科書記述が次の課題となるであ

ろう。いずれにせよ、その直前の並置的な「テーマとレーマ」は、準備として必要であり、また従来のドイツ語教科書は初級コースの最終章として、この観点の導入を余儀なくされるのではないだろうか。

主要参考文献

山本　務「ドイツ語におけるテーマ・テーマ関係の分析――テクスト言語学に寄せて――」『九州看護福祉大学 紀要 VOL. 3』、九州看護福祉大学、2001年

Harald Weinrich: *Textgrammatik der deutschen Sprache*,Dudenverlag 1993ハラルト・ヴァインリヒ著 脇坂 豊編 植木　子・江口豊・大瀧敏夫・大浜るい子・竹内義晴・田中慎・中澤三津子・日置孝次郎・増本浩子・脇坂豊訳 『テクストからみたドイツ語文法』三修社、2003年

ミッシエル・フーコー『言葉と物――人文科学の考古学――』渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974年

Ulrich Engel: *Deutsche Grammatik,3.,korrigierte Auflage*,Julius Groos Verlag 1996

Harro Gross: *Einführung in die germanistische Linguistik,Neu* bearbeitet von Klaus Fischer,indicium Verlag 1998

Hans Dieter Fischer,Horst Uerpmann:*Einführung in die deutsche Sprachwissenschaft.Ein Arbeitsbuch*,Ehrenwirth 1996

『関口存男著作集 全13巻』三修社、1994年

岩崎　英二郎『ドイツ語副詞辞典』白水社、1998年

乙政 潤著『入門ドイツ語学研究』大学書林、平成13年

成瀬　武史著『意味の文脈――通じる世界の言葉と心――』研究社出版、1989年

マイケル・マッカーシー著　安藤貞雄・加藤克美訳『語学教師のための談話分析』大修館、1995年

小泉 保 編『言語研究における機能主義』くろしお出版、2000年

M.A.K.ハリデー著　山口登・筧寿雄訳『機能文法概説――ハリデー理論への誘い――』くろしお出版、2001年

大野　晋『日本語練習帳』岩波新書、岩波書店、1999年

（なお本稿は、その一部が近刊予定のドイツ語教科書『ヴァイツゼッカー演説による人間学へのエチュード』（山本 務、秋田 静男編著、朝日出版社刊）に採録されることを断っておきたい）

Einführung und Definitionen einer Terminologie „Thema und Rhema“ zum japanischen Deutschunterricht

Tsutomu YAMAMOTO

»Resumee«

Dass ein Satz (eine Äußerung) aus ungleichen zwei Bestandteile besteht,das hat man seit der europäischen griechischen Antike betrachtet. In der Tat ist es bemerkenswert, daß sich jedes Satz in zwei ungleiche Teile gliedern läßt. Aber dass gerade die Betandteile keine traditionelle Terminologie ‚Subjekt und Prädikat‘,sondern ‚Thema und Rhema‘ genannt und geforscht worden sind,das ist erst mit den Jahren 1960s in Prag in Gang. Besonders im Fachgebiet Textgrammatik ist Thema—Rhema Struktur ein Grundbegriff geworden.

Eine Einführung des Forschungsergebnisses der Textgrammatiker in ein Unterricht der deutschen Sprache steht noch in der japanischen Universität aus. Das ist vernachlässig gewesen , glaube ich.

Bisher fehlt es in der japanischen Deutschlehrbuch an Definition einer Terminologie. Als Terminologie muß man ‚Thema und Rhema‘ definieren.

Auf dem Grundannahme, daß man in der Sprache und in dem Gedanken einfach und fundamental auf dem Grund der Unterscheidung zwischen einer Unbekanntschaft und einer Bekanntschaft tätig ist, wird *thematisch* das jeweils weniger Unbekanntes, *rhematisch* daß jeweils Unbekanntere genannt.

Schlüsselbegriffe:

Textgrammatik,die Definitionen und Ausgliederung einer Terminologie„ Thema und Rhema “,bekannt und unbekannt,Wortstellung,die japanische Sprache und die deutsche Sprache